

北海道博物館協会 学芸職員部会ニュース

第 83 号

2014 年（平成 26）年 12 月 16 日
北海道博物館協会学芸職員部会

学芸職員部会 副部長に就任して

学芸職員部会 副部長

小樽市総合博物館 佐藤 卓司

会員みなさま、9月に開催された八雲の総会・研修会どうもごくろうさまでした。また欠席された会員の方には次回お会いできることを期待します。

さて平成25年の様似町での総会から新体制に代わり新たに選出された森岡健治部会長の補佐として副部長を務めております。副部長としては三期目で前任の白老町の武永真さん、えりも町の中岡利泰さんにはいろいろご指導いただき勉強させていただきました。森岡部会長には引き続きのご指導お願いいたします。あわせて新役員の方、会員みなさまもどうぞよろしくお願いいたします。

私が副部長になってからの学芸職員部会は、年々会員数が増加し特に新人や若手の会員が増え活気が出てきているように感じます。ぜひ将来の北海道博物館業界をより活性化して欲しいものです。

自分も諸先輩からみればまだまだ若手だと思っていましたがそうも言っていられない立場になっていました。当初は「親会」（北海道博物館協会・その役員会）という言葉の意味すら分からないところから役員をはじめ、ようやく北海道博物館協会の機構や学芸職員部会との関係などが見えてきたところです。三役は部会員みなさんの声を親会に伝える役目もありますのでぜひ忌憚のない声を聞かせてもらい、それを反映できるように努力をしていきたいと思えます。部会が元気だということはそのまま業界の元気にもつながっていくことだと思います。

もう一つ「部会・研修会のあり方」については永遠のテーマである、ということを実感しました。部会に所属して20年近くになりますが、最初の頃はお客さんのような状態で名刺配りに必死でした。後に幹事となり部会の運営に関わってくると、会の目的に沿うような研修会や会のあり方についての議論やテーマづくりに毎回苦労していることがわかりました。結論は出なくても情勢に合わせたテーマや会員の要望に応じていくような事業を実施しながらその答えを模索し、そして現在に繋がっているのです。

これからも「部会は何のためにあるのか？」あり方について同じ議論の繰り返しが続くのかもしれませんが。しかし新体制も1年が過ぎこれからの方向性は固まりつつあります。学芸職員部会は役員だけではなく会を支えるみなさんで創り上げるものだと思います。個人の持っている力を合わせて会が発展していくようにみなさんで頑張っていきましょう。

平成 26 年度 学芸職員部会 総会・研修会が開催されました

9月18～19日の2日間、八雲町を会場に平成26年度学芸職員部会総会・研修会が行われました。学芸員や博物館関係者、総勢40名の方が参加し、総会の協議、実技研修、情報交換会、エクスカージョンを実施しました。

【総 会】

まず平成25年度の事業・決算報告が説明され、原案通り承認されました。続いて平成26年度の事業計画・予算が協議され、概ね原案通り承認されましたが、新たな取組みの紹介と情報提供がありました。内容は以下のとおりとなります。

①学芸職員データベースの整備について

学芸職員は各専門分野を持っており、地域の方からの多様な要望や質問に応えるため、会員相互の協カツールとして学芸職員のデータベースを構築することを目指す。平成26年度は、データベース整備のワーキンググループで内容を検討し、試行に向けて作業を進めたい。

②部会HPコラムリレー冊子化の検討について

より多くの方に博物館や学芸職員の仕事を身近に感じていただくため、これまで継続しているコラムリレーの冊子化を検討する。同じくワーキンググループで詳しい内容を検討する。

③情報提供「国立アイヌ博物館の設立準備」について

今年より、文化庁調査官として勤務されている、元帯広百年記念館の内田さんからの情報提供で、平成32年の北海道初となる国立博物館設立に向け、各博物館・資料館のネットワークを見据えた運営を目指すべく、今後文化庁よりアンケートを実施する予定。部会WEBページを利用し、学芸職員の率直な意見を抽出する。



【研 修 会】

研修会は近年、実際に学芸業務に役立つ技術的な内容を行っています。2つのグループに分かれ、展示分野研修として「文化財のデジタル技術とその活用」を、歴史分野技術研修として「石器をつくる～たった一つの石器からはじまる総合的な学習」を行いました。

①展示分野研修「文化財のデジタル技術とその活用」

タブレット端末やAV機器が身近のものとなり、こうしたデジタルデバイスを展示や普及活動活用している館園が増えています。この研修では、市立函館博物館とはこだて未来大学共同の取組みを学びました。はこだて未来大学の川嶋先生、木村先生からは以

下のことを学びました。

- 写真や絵図等の資料をデジタル化すると、パネルや検索等様々なものに活用できる。
- デジタル画像と実物資料を見比べると新たな発見がある。デジタル画像はパソコン上で細かなところまで長時間見ることができる特性がある。
- できるだけ高解像でスキャンする。
- スキャン等複製の方法は、単純で使いやすい状態にすると人がかわっても利用できる。
- 「デジタルアーカイブにおけるグラフィックデザインの原則」

- メインコピー
- サブコピー
- メインビジュアル
- メインカラー
- 基本情報

で、この組み合わせによってチラシやポスターが効果的にできる。

その後、各館園で取り組んでいるデジタル活用のアイデアを出し合いました。

以下に発表した内容を記します。(発表順)



所属館園	発表学芸員	主なデジタル活用方法
浦河町立郷土博物館	伊藤	8ミリフィルムのDVD化、ネガフィルムのデジタル化→展示に活用
三笠市立博物館	栗原	様々なアングルで撮影したアンモナイトを市販ソフトを使って結合させ、360°回転して見る展示。
新冠町郷土資料館	新川	新冠の様々な草花の画像をデジタルフォトフレームで見せる。
厚沢部町教育委員会	石井	GPSとデジタルカメラでオリジナル体験マップ作り。
八雲町郷土資料館	大谷	資料館を照会するPVを作ってYouTubeで公開。道の駅で放映。
帯広百年記念館	大和田	iPodを利用した展示解説。展示室各コーナーの解説。
根室市歴史と自然の資料館	猪熊	iMovie等を使ったスライドショーをPCモニター等で上映。史跡を紹介する動画をYouTubeにアップ。iPadに古地図や地図を入れる。
士別市立博物館	本部	古写真をFilemakerでデータベース化、来館者が閲覧できる。展示物に関連する写真をデジタルフォトフレームを置いて紹介。
北網圏北見文化センター	柳谷	植物標本データベースをアクセスで文字データ入力。屯田兵・北光社データベース公開。北見市アーカイブシステムの展示公開。ホームページ。
北海道開拓期記念館	櫻井	特別展展示室にデジタルフォトフレームを設置し、静止画をスライドショーで公開。

②歴史分野技術研修「石器をつくる～たった一つの石器からはじまる総合的な学習」

歴史分野の技術研修は今金町にあるピリカ旧石器文化館の宮本雅通さんを講師に17名の参加者で実施されました。内容は①石器づくりのねらい②運営上の留意点③実践という構成で、①と②はスライドによる説明でしたが短時間でも石器の魅力が伝わる解説でした。



そして実際に矢じり製作に進みます。事前にケガなどの危険も伴うので細かい注意がありました。

まずは宮本さんが実演をしながら削り方の理屈や角度などを黒板で説明、聞いている時は簡単そうに感じたのですが実際はかなり難しい作業です。ある程度力も必要で手が痛くなりました。形ができあがると柄を取付け、屋外で実際に的当てを行い、最後に後片づけをして終了となりました。

感想として、石器は全くの素人で初めての体験なので「石器づくり」の習得ではなく、その運営方法や講座の流れなど自分の館でも活かせる事を探そうという目的でしたが大いに勉強になりました。

研修内容は良かったのですが運営側の立場として見た反省点もありました。例えば「自分の館に所蔵する資料ではこういう事ができる」「この部分を改良できる」「こういうやり方をすればケガが防げるのでは」といったアイデアや議論など、各館の体験講座の事例を持ち寄り意見交換するなど、体験だけで終わるのではなく全員が講師となりそれぞれ各館に戻った時に活かせるような研修の流れにするコーディネートが必要だったのではないかとこの点など。次回研修会に向けての検討課題にしたいと思います。

(文：小樽市総合博物館 佐藤卓司)



【エクスカージョン】

2日目の研修会のエクスカージョンは、八雲町郷土資料館の大谷学芸員のご案内により、八雲町内の「木彫り熊関連スポット」を見学しました。八雲町は木彫り熊発祥の地です。北海道の観光土産品として知られる木彫り



熊は、徳川農場の藩士が八雲の農民に制作を奨励したことに始まり、全



道に普及していったといいます。木彫り熊を作るために実際に熊を見ながら制作するための熊飼育の檻跡など、興味深い関連スポットがたくさんありました。

ようこそ！学芸職員部会へ！

今年度、学芸職員部会に新しく加入された方を紹介いたします。(50音順)

小林 貢さん（市立函館博物館）

今年度の研修会で入会しました小林貢です。以後、よろしくお願いいたします。

八雲町での研修会では私どもの調整が上手くいかず、参加者の方々の事例発表・質疑応答の時間を十分に取ることが出来ず、失礼いたしました。この場を借りて、お詫びいたします。ですが、皆さん方が実践されてきた事例や、思案されていることを伺うことで、自分の館でも出来ることはないか、また、改善出来ることはないか、非常に興味深い研修会となりました。

現在、私どもの館ではデジタルアーカイブ事業を、また、これとは別に、道南ブロック博物館施設等連絡協議会ではWEB版道南文化財マップの公開に向けた活動を、公立はこだて未来大学と進めておりますので、参考に出来る点は、積極的に取り入れて行きたいと思えます。また、これらの活動の実施状況についても、折に触れて情報発信しますので、いましばらくお待ちください。

私は考古を担当しておりますが、合併前の勤務地である南茅部地域の写真を受け入れたことをきっかけに、「大謀網」と呼ばれるマグロを対象とする定置網について、現在調査を続けています。私が調べているのは主に戦前、昭和10年代の状況ですが、地域では当たり前目にしていたことから、資料として現存する物が少なく、さらには当時を知る古老の方も少なくなり、漁獲から消費の過程を一連の流れで追えないのが苦しいところです。ですので、戦前のマグロの流通について何か情報がありましたら、ご教示頂ければ幸いです。最後は自分のお願いになりましたが、これからよろしくお付き合いください。

杉本 加奈子さん（おびひろ動物園）

学芸職員部会の皆様、はじめまして。おびひろ動物園の杉本加奈子です。飼育員として日々動物たちと向き合いながら、傍らで学芸員をやっています。動物園に勤務する以前に帯広百年記念館で勤務していた経緯もあり、部会へお誘いいただき、このたび入会する運びとなりました。よろしくお願いいたします。

専門は野生動物、動物園動物、学生時代からヒトと動物の関係学について研究しています。とはいえ、動物園では研究活動はなかなか行えず、教育活動が主な学芸業務になっています。

担当動物はチンパンジーとゴマフアザラシ、どちらも22歳のペアを相手にしています。さらに、どちらもメスは人工哺育やトレーニングなどで人慣れし、要領が良く、オスはもともと要領が悪いという似た境遇にあります。来園者には人馴れしているメスの方が可愛らしく映るようですが、日頃接していると、バカな子ほど可愛いではないですが、オスも可愛らしいものです。そんな魅力を多くの来園者に伝えていきたいと思っています。

ここ数年は帯広百年記念館や近隣の社会教育施設との連携、市外の博物館との連携も増え、企画展示やイベント行事などで幅広い博物館活動が行えるようになってきました。園内の活動のみならず、来園者の動きも連携施設へ訪れるケースが増えるなど、連携による生涯学習の広がりを感じています。

今年度の研修会には参加できませんでしたが、今後多くの学芸員の皆様と交流を深め、動物園での博物館活動に活かしていきたいと思っています。

まだまだ経験も浅く、不慣れなこともあります、ご指導賜りますようお願い申し上げます。

本部 哲矢さん（士別市立博物館）

こんにちは。今年度入会させていただきました本部哲矢と申します。所属は標津でも標茶でもなく士別の博物館です。地元は愛知の名古屋、大学は静岡、今年の4月から道北の士別に移り住みました。北海道1年目であり、社会人1年目であり、学芸員としても1年目であり…。初めてのことばかりで新鮮な毎日を過ごしています。先日早速アパート前で車が雪にはまって、動けなくなってしまいました。雪国の生活に適応していくのには時間がかかりそうです。

大学では鳥の鳴き声の研究をしていました。鳴き声を録音し、音声解析をするといったものです。今までは室内での研究が主でしたが、大自然に囲まれた北海道に来た以上、できるだけフィールドに飛び出していきたいと思っています。士別を含め道北地域は、自然分野の調査研究が他地域と比べると行われておらず、まだまだ調査の余地が多くあると聞きました。自然担当の学芸員として、この地域の自然について少しでも明らかにしていきたいと思っています。

今回、学芸職員部会研修とミュージアムマネジメント研修会の両方に参加しました。部会の研修では、文化財のデジタル記録を受講しました。講演や参加者それぞれの活動紹介を通じて、資料をデジタルデータとして残すだけでなく、どのように利用者に還元していくのが重要だと感じました。また交流会では、道内各地の方々と交流させていただきました。皆さんとお話したことを参考にしながら、学芸員として励んでいきたいと思っています。

来年度の学芸職員部会研修は士別で開催することとなりました。実りある研修になるように準備していきますので、ぜひご参加ください。

☆編・集・後・記☆

3人で編集担当になって3号目のニュース発行となります。今号は、八雲での研修結果を中心に掲載しました。あわせて、新会員の方の紹介をしています。今回は投稿数が少ない結果となりましたが、次号以降の掲載で引き続き投稿を募集いたしますので、ぜひご協力のほどよろしくお願いいたします。

また、「このような内容を記事にしてほしい」というご要望がありましたら、編集担当までご連絡下さい。あわせて、新会員の募集も随時、行っていますのでよろしくお願いいたします。

入会申込案内 <http://www.hkma.jp/hkcurators-recruit>

北海道博物館協会 学芸職員部会ニュース 第83号

発行日 2014年12月16日

編集 会田理人（北海道開拓記念館）、斉藤譲一（稚内市教育委員会）、新川剛生（新冠町郷土資料館）

発行者 北海道博物館協会学芸職員部会

〒087-0032 北海道根室市花咲港 209 根室市歴史と自然の資料館 tel/fax 0153-25-3661

北海道博物館協会ホームページ <http://www.hkma.jp>

学芸職員部会ホームページ <http://www.hk-curators.jp>